

テレビや映画といった映像を主に活躍の場に行っている俳優

は、舞台俳優に対して「よく毎日同じ台詞で稽古をして飽きないものだ」という。映像は瞬間

芸といえる。撮影現場で1回か2回のテストをすると、本番のカメラが回る。監督やカメラ、スタッフによって位置関係からロングかアップかまで決められている。コンテである。俳優はそれを察知して動かなければならない。監督がオーケーとい

えば撮り直しはない。俳優が納得いなくてもそうである。あの監督が「俺には鉄がある」とうそぶいた。つまり、編集でどうにでもなるといった意味である。「あのシーンだけはカットにはならないだろう」。それほど迫真の演技をしたつもり

名作には名脚本家

ると演劇論になる。ベテランの俳優が若い俳優に駄目だしをしたりする。自分ができてない鬱憤を若手にぶつけるのである。「人のことはいいから」とわたしが中に入ってなだめる。台詞が入り動きが決まり始めると、だれも飲みこみ誘わなくな

けるのはベテランの方になる。演出家はそうなることはわかっている。舞台の稽古の味を知った映像の俳優は舞台劇の虜となる。「また、舞台がやりたいです。ぜひ誘ってください」といって打ち上げが終わる。簡単にいっちゃって、である。

には相性のいい俳優が出演している。一家ともいわれるチームである。黒澤明監督に三船敏郎、深作欣二監督に菅原文太、ジョン・フォード監督にジョン・ウエイン。不幸なことに、ある日チームが崩れる。監督にも俳優にも不幸である。「俺があつてこそ」。互いにそう考え始めるのかもしれない。作品にもマンネリを感じ始めるのかもしれない。新しい人と新しいことをやってみたい。しかし、観客は往年の名作と比較して不満を感じる。「七人の侍」や「用心棒」「仁義なき戦い」。どの作品にも名脚本家がいたことを忘れてはならない。

でも、簡単にカットをされている。稽古が終了するとそそくさと帰る。わたしを避ける。「稽古場であれままでいわれて、なにも飲み屋までも」である。自分に集中したいからである。ベテランも若手に苦言を呈する余裕がなくなり、ペテランほど台詞

も、簡単にカットをされている。稽古が終了するとそそくさと帰る。わたしを避ける。「稽古場であれままでいわれて、なにも飲み屋までも」である。自分に集中したいからである。ベテランも若手に苦言を呈する余裕がなくなり、ペテランほど台詞

も、簡単にカットをされている。稽古が終了するとそそくさと帰る。わたしを避ける。「稽古場であれままでいわれて、なにも飲み屋までも」である。自分に集中したいからである。ベテランも若手に苦言を呈する余裕がなくなり、ペテランほど台詞

も、簡単にカットをされている。稽古が終了するとそそくさと帰る。わたしを避ける。「稽古場であれままでいわれて、なにも飲み屋までも」である。自分に集中したいからである。ベテランも若手に苦言を呈する余裕がなくなり、ペテランほど台詞